

社会倫理研究所NEWSLETTER

社会倫理研究所ニューズレター

第22号 | 2007年4月・5月

■CONTENTS | 記事 | 社倫研ニュース | 懇話会オンライン | 懇話会報告 |

【学界展望】教皇庁 正義と平和 協議会主催セミナー「気候変動と 開発」参加報告書

M. シーゲル (社会倫理研究所第一種研究所員)

教皇庁正義と平和協議会は2007年4月26～27日に『気候変動と開発』というテーマでセミナーを開催した。セミナーの参加者は80人を越える人数だった。参加者名簿には81名の名前が載っていたが、私自身を含めて、遅く登録した何人かの参加者は名簿に載っていなかった。私は日本カトリック正義と平和協議会の依頼で参加した。セミナーの司会は教皇庁正義と平和協議会の会長、マルティノ枢機卿が勤めた。

1. セミナーについて

セミナーの不可解な側面

今回のセミナーに関する感想を書くことは決して簡単ではない。今回のセミナーが評価に困るものであったからである。セミナーの方針も招聘された専門家も、私の予想にまったく相反するものであった。主催側にとっても多少予想外だったという印象もある。おそらくこのセミナーを理解するには、セミナーの目的が情報収集だったことを念頭におく必要があるだろう。つまり、温暖化に関する何らかの立場を固めるようなことが目的ではなく、目的はむしろその前の段階の情報収集だった。マルティノ枢機卿は数回そのことを明確に表明した。その目的のために、広い範囲にわたって、多数の視点を持つ専門家が求められたそうである。

しかし広い範囲にわたって多数の視点を代表する専門家が集まったとは言いがたい。少なくとも科学を専門とする参加者には、温暖化の問題を否定する人、もしくは温暖化が人災だということを否定する人が圧倒的に多かったのである。

だからといって、教皇庁正義と平和協議会の立場が温暖化問題の否定にあるというこ

とではない。マルティノ枢機卿自身も、問題の深刻さと人間の役目に対する認識を明確に表明した。私もマルティノ枢機卿と少しだけ招聘された専門家のことについて相談するチャンスがあり、広く参加者を募集したが応募した人たちに多少の偏りがあったという説明を受けたのである。

しかし、否定論が多かったため、セミナーでの議論は、温暖化が本当に脅威なのか、本当に人間のやることに起因するのかという課題に議論が集中してしまい、それ以上進展しなかった。それ以外に温暖化に関連する問題で議論されるべきものは多数ある。温暖化に歯止めをかけるのに、いつまでにどの程度に温室効果ガス排出を制限しなければならないのか。生活様式や技術だけで解決できるのか、それとも基本的な経済システムを変える必要があるのか。これらの点に関して倫理の問題が大きくかかわるし、貧しい人が犠牲になる対策が選択される恐れもあるので、これらの問題について教会は見解を明確にする必要がある。しかしこのセミナーでは、議論はこのような課題にまったく及ばなかった。

教会にはその教えと伝統があると同時に、世界中の多くの貧困者や虐げられた人々との接点もあり、教会はだれよりもこれらの人々の立場を代表することができるはずである。本報告書の目的の一つは、教皇庁正義と平和協議会に対して、新たな研究のプロセスを開始するよう呼びかけることである。それは国連の気候変動に関する政府間パネル(以下、IPCC)の報告書を前提とした研究で、温暖化に対する、キリスト教倫理に基づいた取り組みを明記するための研究である。

セミナーの内容

セミナーは四つのセッションに分けられていた。第一セッション(4月26日午前)は「歴史の視点」というテーマだったが、温暖化問題の紹介となった。フランスの環境大臣ローレン・ステファニーニは温暖化に関する認識の歴史について語り、イギリス国務長官の環境担当者デービッド・ミリバンド大臣は問題の原因に最も荷担していない貧しい人たちがその被害を最も受けることを指摘して、温暖化に関する倫理的な視点の重要性を強調した。ポツダムのClimatic Impact Research 研究所のステファン・ラムストーフはIPCCの概要と結論を紹介した。ラムストーフの発表で特に興味深かったのは2001年以降に確認されている温暖化が2001年のIPCCの最高の予想に非常に近いものだったことを示すスライドだった。IPCCの予想は大げさどころか、控えめすぎるということを示唆するものであった。

この最初の三つの発表はすべて、温暖化を深刻な問題として捉えていた。第四の発表からその反対の意見が述べられるようになった。第四の発表者だったイタリアの物理学者アントニーノ・ズィキキ(Antonio Zichichi)は数学に関する理論を基にして、気候や天気のみ込み入った複雑さによりIPCCがしているような計算が成り立たないと論じたのである。それに、温暖化が起こるとしても、それは太陽の活発さ、宇宙線の度合い、火山等の影響によることもありうるので人間の工業活動に起因すると考える根拠はないと論じ

た。ズイキキはかなり有名な核物理学者であり、核物理学の分野においてはいくつかの重要な発見をしている。しかし英語版ウィキペディアの記事によると、イデオロギー的なバイアスで批判されている。気候学者ではないし、気候学に関する学術論文を書くこともない。IPCCへの批判は数学の理論によるものである。

この第一セッションには五番目の発表も予定されていた。それはガイアナの国立気候変動委員会のシラム・ノクタによるものの予定だったが、ノクタは参加ができなくなっていた。ノクタの論文は配布され、それは熱帯雨林と温暖化の関係をとり上げ、温暖化を深刻な問題として認識するものだった。

26日の午後のセッションはインドゥル・ゴクラニ(Indur M. Goklany)の発表から始まる予定だったが、ゴクラニも健康上の理由で参加できなくなった。ゴクラニの発表も文書として配布された。題名は『他のより緊急な課題の文脈における、温暖化への対応』ということであった。題名から明確であるが、ゴクラニは温暖化を重要視していないし、温暖化対策への投資は他のより緊急な問題への対応を遅れさせると見ている。ゴクラニは経済学者(ただし、修士及び博士の研究は電気工学だった)であり、米国の内務省に勤めている。気候変動の不確実性に訴えて、飢餓問題や他の環境問題がもっと大きな脅威だと論じ、温暖化よりその他の問題への対応が優先だと論じている。

ゴクラニの代わりに、セミナーのプログラムに載っていなかったフレッド・シンガー(Fred Singer)が発表することになった。シンガーはもともと電気工学と物理学を専門とする米国の科学者だが、多数の分野で企業の立場を弁護してきた人である。タバコが肺癌の原因ではない、フロンガスがオゾン層を破壊しないといったことなどを論じてきて、気候変動に関しては石油企業のために研究してきたことを本人も認めている。企業から個人的にお金をもらっていることを否定しているが、シンガーの研究所がExxonMobilから支援されてきたことは事実である。根本的にはシンガーは他の否定論者と同様に機構の複雑さと温室効果ガス以外の原因を強調した。

第二セッションの二つ目の発表は米国の二酸化炭素とグローバル変動研究センターのクレイグ・イドソ(Craig Idso)によるものであった。イドソも温暖化の問題を否定する人である。修士・博士課程の研究は地理と農業経営学であって、現在その父親と兄と一緒に、主に石炭企業と石油企業によって支援されている「二酸化炭素とグローバルな変動」をテーマとする研究所で働いている。イドソは、温暖化と二酸化炭素の増加は植物の成長を助けるので食糧生産などの増加につながるよいものだと論じて、化石燃料の使用と二酸化炭素排出の増加を呼びかけている！！

第二セッションの最後の発表では国際地球科学研究センターのクラウディオ・ラファネリ(Claudio Rafanelli)は、気候変動に関連する科学の不確実性を強調し、人間の活動以外にも温暖化を引き起こしうるものがあると強調した。ラファネリは完全に否定論者ではなく、化石燃料に代行するエネルギー源の必要性も認めながら、化石燃料を使う技術の改良の必要性も指摘した。

セミナーの二日目の最初の二人の発表者は気候変動を真剣な問題として取り上げた。発表者はアルゼンチンの外務省のエストラダ・オユエラ(Estrada Oyuela)とポーランドの環境大臣ヤン・ジジュスコ(Jan Szyzsko)だった。ジジュスコは人間の活動によらない温暖化の可能性も指摘していたが、二人はともに国際法とのかかわりを取り上げ、京都議定書に特別に注目した。オユエラは発展途上国への被害に特別に注目し、ジジュスコは植林に関してポーランドの経験について述べた。この二人に続いて、ケニヤの草の根レベルの市民団体の代表としてマサイ族のシャロン・ルーレメタ(Sharon Looremeta)が発表した。ルーレメタは温暖化が未来の問題ではなく、すでに起きていることであり、そのために人々がすでに命を落としていると論じた。特に旱魃がその原因である。先進国に主要の責任があると論じ、先進国が行動を起こす必要性を強調した。

この第三セッション(27日午前)の最後の発表は米国のノックス神学校のカルヴィン・バイスナー(Calvin Beisner)によるものだった。バイスナーは福音派の人で、聖書を言葉通りの意味で真実として受け止め、あらゆる科学をそれに合わそうとする。たとえば彼の理論によれば、石油があるのは、ノアの時代の洪水によって多くの植物や動物が死に、腐っていき、石油になったためだということである！！バイスナーは、心配になるほどの規模の温暖化が起こる可能性を否定し、またそれが人災だということも否定する。石油は工業を支えるための神の摂理によるものであり、それを使うことから被害があるとは考えられない、という理論らしい。セミナーの場が超宗派的で、多数の神学者がいたのであれば、この人が招聘されたことも理解できなくはないが、セミナーの発表者のうちで唯一の神学者として、聖書の読み方がカトリックの読み方からこれほどかけ離れている人が招聘されたのはまったく理解しがたい。

27日午後のセッションはセミナーの最後のセッションだった。このセッションだけが本来の期待に沿うものだった。発表者は四人いたが、すべて教会関係者だった。最初に、フライブルクのベルンド・ウール(Bernd Uhl)司教が気候変動と教会の社会教理の関連を取り上げ、その後ギリシア正教のエライアス・アブラミデス(Elias Abramides)と聖公会のリバプール主教ジェームズ・ジョーンズ(James Jones)が気候変動への対応に当たっての超宗派的協力について発表し、最後に、オーストラリアのフォーブスのクリストファ・トゥーイ(Christopher Toohey)司教が気候変動と司牧の関連について話した。彼らは皆、気候変動を深刻かつ緊急な問題として捉え、未来の可能性ではなく現におきていることだと訴えていた。

2. セミナーの評価について

合計で14の発表があった。発表者は大まかに三つに区分できる。それはつまり宗教的な背景から話す発表者(バイスナー、ウール、アブラミデス、ジョーンズ、トゥーイ)、政治や行政の背景から話す発表者(ステファニーニ、ミリバンド、オユエラ、ジジュコ)、そして科学もしくは学問の背景から話す発表者(ラムストーン、ツイキキ、イドソ、ラファネリ)という三つである。これに加えて、NGO活動を基盤とする発表者(ルーレメタ)と政治と科学の分野をまたがる発表者(ノクタ)が一人ずついた。

上述の紹介から窺われるように、温暖化の深刻さ、もしくはそれが人災であることを否定していたのは、主に科学や学問を基盤とする発表者だった。バイスナーを除けば、宗教・行政・NGOなどの視点から取り上げる発表者は温暖化を深刻な問題として捉え、それが人災であることを認識していて、科学もしくは学問の立場から参加した人のほとんどがそれを否定する立場を取っていた。科学者として参加した人のうちに気候学者が一人しかいなかったこと、その人も自分の発表の時だけ参加してセミナーのほとんどの議論に参加していなかったことを考えると、この面でセミナーがいかに偏っていたかは明白である。

実際にステファニーニ、ミリバンド、そしてラムストーフの三人、つまり気候変動に関して問題意識を持っていて、それを最も専門的に話せる三人は第一セッションの間だけ参加したのであり、ノクタはまったく参加することができなかったので、セミナーの大半においては気候変動の問題を否定する専門家がいつそう強い存在となった。

一般参加者の中にもIPCCの立場を否定し温暖化の深刻さを否定する人が何人もいた。特にLegionaries of Christからの参加者は会場でグループを作っていた。私はLegionaries of Christに初めて接したが、セミナーを通じてこのグループが温暖化問題の否定者の中心となっていたという印象が強かった。Legionaries of Christの一人はZenit Newsという報道機関の記者だったが、Zenit Newsの英文報道でのセミナーに関する報告にはツイキキの否定論のみが紹介され、温暖化を深刻な問題として捉える人々の見解は一切報道されなかった。

温暖化問題否定論

温暖化を否定する(つまり温暖化が深刻な問題であること、もしくはそれが人災であることを否定する)人々の理論には二つの基本的考えがあった。一つは気候の複雑さのことであり、もう一つは気候が常に変動するものであり、今の気候変動も自然な現象であり、人間の活動によるものだと考える理由がないという考えである。

気候の複雑さに訴える理論はIPCCの計算がその複雑さを十分に認識していなくて、その結論が頼りないということである。しかし、奇妙なことに、IPCCに対して気候の複雑さを訴える人たちは温暖化の深刻さ、あるいはそれが人災であることを否定するとき、その複雑さをまったく無視した単純な理論に頼るのである。たとえば二酸化炭素の増加によって食糧生産が増えるというイドソの理論は一つだけの要因を基にして結論を出している。早魃や豪雨の増加など、他の要因の影響をまったく無視している。

またフレッド・シンガーが述べた、温暖化を否定する一つの理論は1998年が記録上のもっとも暑い年だったというIPCCの報告をもとに、その年以降にも大気中二酸化炭素が増加しているのに気温が上がっていないので二酸化炭素の増加が温暖化を引き起こしていない証拠だということであった。この理論は明らかに気候の複雑さを無視している。IPCCは温暖化には多数の要因があるから一直線に進むものではないと論じてきた。むしろIPCCのほうが気候の複雑さを認識しているのである。

また、ある否定論者(発表者ではなかったが、イギリスの貴族院のモンクトン子爵)はオーストラリアの早魃が温暖化によるものだということがありえないと個人的に私に論じた。それは温暖化によって水分の蒸発が活性化し、雨量が増えるはずだからである。しかしIPCCはこのことも十分に認識しており、雨量が多くなる地域と少なくなる地域があり、雨量全体が増えたとしても乾燥地帯では雨量がいつそう少なくなることを指摘している。この点でも、その否定論者よりもIPCCのほうが気候の複雑さを認識している。

現在の気候変動が自然であるという理論もしっかりした根拠があるようには思えない。確かに気候変動は自然に起こるものである。しかし、だからといって、現在の温暖化が人間の活動によるものではないと結論できるわけではない。太陽、火山、宇宙線などの影響は現に研究されており、その上で、現在の温暖化のほとんどが人間の営みによるものだという結論が出されている。しかも、現在予想されている温暖化の速度は以前の自然な気候変動の速度に比べてかなり速く、安易にかつての自然の気候変動と一緒にすることにも問題がある。

それに、もし宇宙線や太陽が原因だとすればその影響を受ける地球の大気のすべてが温暖化しているはずであるが、実際は対流圏だけが温暖化しており、成層圏および電離層はむしろ冷却化している。成層圏と電離層の冷却化は対流圏における二酸化炭素などの温室効果ガスによって地球から放射される赤外線が閉じ込められ、成層圏まで行かなくなっているというシナリオと見事に一致している。これは現在の温暖化が増進温室効果によるものだということを強く裏付けるものである。

否定論に反対した人の立場

温暖化を深刻な問題として受け止めるべきだと論じた参加者は温暖化が未来において起こるかもしれない現象ではなく、すでに起きているものだと言ったのである。オーストラリアやアフリカなどの早魃の深刻さ、日本、フィリピン、米国における台風、竜巻、ハリケーンなどの頻繁さと強烈さ、氷河や両極の氷の減少、ヨーロッパを襲った未曾有の熱波などのことを考えると温暖化が現に起きているということに関しては疑問の余地がないと訴えられた。人災か天災かということに関して、予防原則が重要だと捉えられた。二酸化炭素が温室効果ガスであることは否定論者できえ認めている(その効果の度合いに関して異論を述べるとしても)。IPCCが「きわめて高い自信を持って」人災だと述べていることこそが方策を導く基準になるはずである。

セミナーの限界

このセミナーで取り上げられるべきであって、実際に取り上げられていない重要な課題がいくつかある。

まずは、すでに述べたとおり、温暖化に対応するにはどの程度の時間的余裕があるかという問題である。温暖化は自己活性化の段階に入らるだろうと指摘されている。つま

り、氷河や両極の氷が溶けると、かつてその氷によって反射させられていた光線が大気や海に吸収されてしまい、温暖化のプロセスを加速させ、結局温暖化によって温暖化が悪化するという悪循環が生じる。また、永久凍土が溶けることによって二酸化炭素より22倍の温室効果を持つ天然ガスが大量に放出されることになり、これも温暖化によって温暖化が悪化するという悪循環を引き起こす。そうすると意外に早く温暖化は解決不能の状態になっていく。どの時点でそうなるかは、言うまでもなく重要である。つまり、温暖化への対応はその対応が温暖化の自己活性化に圧倒されるようになる前にやはり行われなければならない。セミナーではこのことに触れる発言はまったくなかった。

それに、温暖化への対応が他の問題にどう影響するかが重要である。たとえばバイオ燃料の使用は食糧生産、食糧の価格、そして生物の多様性にどう影響するか。どのような倫理的な視点が必要なのか。どのようなプロセスで対応が決定されるべきなのか。これらのきわめて重大な課題が一切取り上げられなかった。

セミナーの本来の目的だった情報収集はある限られた範囲内で実りがあったといえよう。しかしこのセミナーはむしろ温暖化を真剣に考えるチャンスを無駄にしてしまったと評価せざるを得ない。教皇庁正義と平和協議会は、もっと長期にわたってもっと包括的に気候変動を取り上げる研究プロジェクトを企画し、IPCCの報告を前提として温暖化への対応を考える必要があると思う。二日間のセミナーはやはり十分ではない。

セミナーにおいては、教皇が環境問題を取り上げる回勅を公布するよう要望する発言もあり、また、教皇がそのような回勅を実際に用意しているということを示唆する発言もあった。現時点ではそれは非常に望ましいことである。しかしもし今回のセミナーにあったような偏りがその回勅に反映されたなら、それはむしろ悲劇であろう。

社倫研ニュース

2007年度スタッフは、第一種研究所員3名、第二種研究所員7名、研究員1名、非常勤研究員9名という構成です。詳細については、[こちら](#)をご覧ください。

研究所機関誌『社会と倫理』第21号は、6月中旬に刊行される予定です。今号では、「ビジネス倫理の射程」、「広告倫理研究の現在」と題された特集2本をお届けすることになりました。乞うご期待。

懇話会オンライン

今回は、南山大学社会倫理研究所研究員の中野涼子先生のご講演「[日本帝国の夢と現実—植民地研究者 矢内原忠雄の挑戦](#)」をお届けいたします。

懇話会報告



去る2007年4月28日(土)、南山大学名古屋キャンパスJ棟1階Pルームにて、2007年度第1回懇話会が開催されました。講師に千里金蘭大学の川野祐二先生をお招きして、「篤志家たちと日本の社会貢献—尊徳・渋沢からみる商売と公益」というタイトルでご講演をいただきました。

川野先生はまず、今回はお金持ちのお話をします、と切り出して、富の集中が芸術や文化を創ってきたという歴史的な事実を採り上げ、さらに、19世紀に儲けた人々が財閥を形成し今もなお世界の財のほとんどを手にかけていると述べます。そうした金持ちたちにとっての悩みは「莫大な財をどうすればいいのか」ということであり、自分たちは天国に行けないのではないかという罪悪感をもつことが多いため、贖罪のための助成を行なうこととなります。たとえば、資産総額が1兆円の財団なら、毎年利子として発生する数百億ものお金を1年かけてなんとか配り切らねばなりません、これが大変なのだ、と川野先生ご自身の経験を踏まえて説明されました。そうした超弩級の社会貢献を行なう財閥・財団の特徴は、個人のポケットマネーによって成り立っている点にあります。ポケットマネーゆえに自由かつ大胆に財を配ることができるわけです。

では、近代日本はどうだったのか。川野先生は、日本近代資本主義の父である渋沢栄一思想と事業について説明します。渋沢は、自分のポケットマネーでも十分可能なのに敢えてみんなでお金を出し合って会社を作るという「合本主義」をとり、岩崎弥太郎の独占主義を批判しました。第一国立銀行を初め500の会社を設立しましたが、財閥は作りませんでした。渋沢は、優秀な人材が皆官僚を目指す明治期の風潮の中で、商人の地位向上を目指して一橋大学を創設したり、「道德観は武士のものであって商人には倫理がない」という江戸期の価値観の転換を試みて「士魂商才」を掲げ、道德経済合一説を説きました。600を超える社会貢献事業を行なう際にも渋沢は合本主義を貫き、自らの足を使ってお金を集め、募金の天才と称されました。彼が寄付を募る際にとった奉加帳方式は、経団連方式として日本的募金の基本形となっている、と川野先生は述べました。

時を遡って近世日本はどうだったのか。川野先生は、近代日本の商売と公益心に強い影響を及ぼすことになった石田梅岩と二宮尊徳を採り上げます。石田梅岩の石門心学は、商人の道德観を打ち立て、職業倫理をもつ点では商人も武士も同じであると論じました。二宮尊徳は、資産運用の達人で、百姓出身でありながら武士に取り立てられ、600以上の村落の復興を成し遂げ、最終的に幕臣になり日光復興も手がけた人物です。報徳仕法と呼ばれるその手法は、時の権力者の後ろ盾が必要なものであったのですが、明治政府が



取り入れを拒否したため、行政式仕法ではなく現在のNPO的な結社式仕法を用いた報徳結社が草の根レベルで残存し続けることになった、と川野先生は説明します。川野先生によれば、報徳思想は、「至誠」、「勤労」、「儉約」、「推譲」から成り、最後の「推譲」は、貯金は将来の自分や子孫に譲るべしという「自譲」、および、見ず知らずの人に譲るべしという「他譲」から構成されていて、あらかじめ経営のやり方の中に社会貢献が組み込まれているのが特徴です。報徳思想は、豊田佐吉、御木本幸吉、渋沢栄一、安田善次郎、内村鑑三、土光敏夫らに影響を与え、近代日本の会社経営に深く根を下ろしてきた、と川野先生は述べました。

戦後、日本では財閥解体が行なわれ、富の集中がなくなり、金は株式会社という法人がもつことになってオーナー社長が消滅しました。これにより、企業フィランソロピーや企業メセナという仕方での社会貢献が行なわれることになりました。川野先生は、企業は組織なのでパトロンの自由な発想の篤志活動は事実上困難であり、実際に現在の日本にある1000ほどの助成財団による助成金額は全体で500億円ぐらいであり、それはフォード財団が年間に使うお金と同程度である、と日本の社会貢献の弱さを指摘し、しかしそれが国民にとって幸か不幸かはまだよくわからない、と講演を締めくくりました。

講演後の質疑応答では、渋沢の思想的バックボーンに関する質問や、現在の日本における社会貢献へのモチベーションのありように関する質問、昭和前半の軍国体制における報徳思想の国家利用という問題の指摘、80年代における海外に対する日本企業のフィランソロピーをどう評価するかという問いかけ等が出され、充実した討論が行なわれました。(文責 | 奥田)

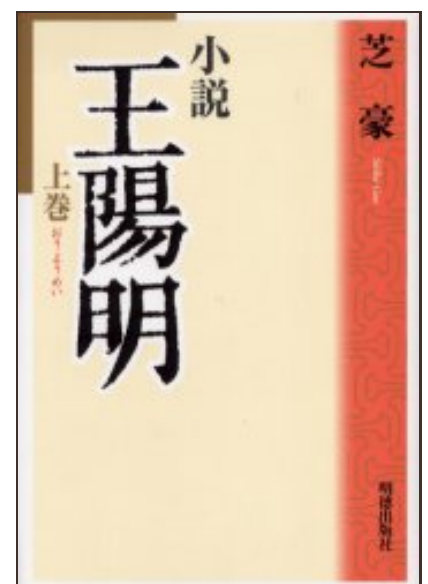
【不定期連載】

こんな本・あんな本 第13回

芝 豪『小説 王陽明』上下巻 (明德出版社、四六版816頁、2006年7月刊行)

王陽明は、我が国においては、高校の学科(倫理社会)で陽明学の始祖として紹介される。そして、心即理、知行合一、致良知という術語が基本術語として一応教えられはする。その実、全く中味を伴った理解は要求されないかのようである。

ここに、人を得て、王陽明の生涯と思想的展開、交友関係、師弟関係が鮮やかに叙述された『小説 王陽明』上下巻が刊行された。流石は作家。既に、中国歴史小説で『太公望』や『太宗李世民』を書いておられる芝豪氏が、いよいよ大思想家たる王陽明執筆に挑まれた。早速読んでみた。素晴らしい!これまで、岡田武彦先生、山下龍二先生などの学術書で陽明王子の事績などに接してきてはいたが、本書は、それを立体的・構造的に映像化してくれた。



上巻は、朱子と陸兄弟の他流試合（鵝湖の会）の描写から始まる。如何にも小説家ならではの筆致である。科挙の章では、数日間缶詰状態に置かれる受験者の様子が描かれ、陽明の後日談への伏線ともなっている。学術書であれば、硬い文章で、難しい内容を手堅く書くことを要求されるため、勢い読者はその難解さにたじろぎ後込みしてしまうことであろう。しかし、そこは小説の有り難さ、興味津々な話題と筆致のため、読者は知らず知らずのうちに物語に引き込まれていく。しかも、芝氏ご自身が「あとがき」で記しておられるように、本書は「陽明学研究書の類を捨てて、陽明の伝記類を参考にし」て、書かれたようである。故に、「九割五部以上は事実を叙述しただけである。」と言われる。

このように、極めて禁欲的に節度を以て書き上げられている本書は、安心して接することが出来ると共に、これをバネに、更に、陽明自身の諸著作、或いは、研究書への橋渡しになると思われる。

上巻では、宦官の跋扈する明朝にあつて弾圧される官吏の救済を求める陽明が丈刑を受け、龍場へ流謫され、しかしその僻地で苦勞心勞する過程でいわゆる龍場大悟が開かれたこと、こうしたことが描かれる。やがて権力を恣にした劉瑾（りゅうきん）が誅される。それに先立ち陽明は罪を解かれて官に復帰するが、職務全うが困難な福建・江西省の治安回復であつた。当時は流賊が猖獗（しょうけつ）を極めていた。皆が避けたがる職務である。それを陽明は見事にこなす。

本書を読んでいて反省を促されたのは、これまで人物伝を読む際、ややもすると主人公（ここでは陽明）だけの目を通して周りを眺め勝ちなところであるが、例えば、王門の顔回といわれた徐愛が作品の中で語る。外の人物でも同様に著者は語らせる。詰り、この小説王陽明の中で、私は作中の複数の人物に内在化同化しつつ、物語の世界を味わい経験しながら通過していることに気づいた。徐愛のお蔭で、現在我々は『傳習録』を手にして読むことができるのである。

下巻では、これまた話題に事欠くことなく、次から次へと興味尽きない陽明の事績が綴られていく。軍事的な抜群の能力も然ることながら、そこには常に儒教の根本教義が据えられていた。何か。それは『大学』に見える八条目の実践であり、要するに、修己治人であり、明明徳である。自己修養はしかし、「事上において磨錬する」ことであつた。高級官僚は、平天下のために努力して成果を挙げる者を賞賛するどころか、却ってこれを妬み失脚させようと画策する。そうした中で、陽明は益々己を鍛え上げていった。

病身でありながらも、陽明は、死んで来いとばかりの朝命を、辞退するも受理されず、受けて最後の征旅に出掛けることになる。生きて帰郷の叶わぬ運命の師陽明に、二人の高弟が最後の教えを聞く場面がある。「四句教」。これも通常の学術書であれば、肝腎の四句の吟味解説だけに終るところであるが、小説王陽明では、クライマックスに向って助走から諄々と語られる。

一体、儒教の核心をどこに見たらよいのか。岡田博士は、「斯人之徒與」（斯の人の徒と與にする）という孔子の言葉（『論語』微子六）に求められた。それは、陽明の場合、いわゆる抜本塞源論であり万物一体の仁の心である。芝氏の小説から該当箇所を引用しよう。

ああ、いまの人がわたしのことを心を病む者、心を喪う者と見なすのは仕方のないことです。天下の人の心は皆わたしの心であります。天下の人に心を病む者がいる限り、どうしてわたしが免れることができましょう。天下の人に心を喪う者がいる限り、どうしてわたしが免れることができましょう。
(下巻323頁)

この引用文を眺めていると、実は同様の文を思い起す。それは、『維摩経』である。中村元博士の訳文を引こう。

たとえていうならば、ある長者にただ一人の子があったとして、その子が病にかかれば父母もまた病み、もしも子の病がなおったならば、父母の病もまたなおるようなものです。菩薩もそのようなものです。もろもろの衆生を愛することは、自分の子を愛するようなものです。衆生が病むときは、すなわち菩薩も病み、衆生の病がなおれば、菩薩の病もまたなおるのです。またくこの病は何によって起こったのであるか>というならば、菩薩の病は大悲（偉大なあわれみ）のゆえに起こったのであります。（『維摩経、勝鬘経』東京書籍、2003年、195-196頁）

波乱万丈の生涯を誠実に生き抜いた陽明の姿が、『小説 王陽明』でエピソードを交え、或るときは関係者の目を通して描かれている。これにより陽明入門が容易になったことは間違いのないであろう。さて、その中身の詳細については、もちろん読者各位が自ら取り組んで頂きたい。

(第13回担当 | 山田 秀)